

心理学・社会科学研究のための 調査系論文の読み方

浦上 昌則
脇田 貴文 著

東京図書

サンプル論文 1～5

◎この本の4章から8章の最初にある

- ・サンプル論文1「動物に対する共感性尺度の作成」
- ・サンプル論文2「介護意識の形成―高齢者との同居経験と高齢者観との関連から―」
- ・サンプル論文3「交際経験が同性との関係観におよぼす影響―大学生を対象として―」
- ・サンプル論文4「40歳代男性の生活満足感に影響する要因の探索的研究」
- ・サンプル論文5「試験への動機づけとその結果の関連―学びの個性に着目して―」

以上の5つのサンプル論文（すべてダミー論文）を以下に掲載します。本文の解説との対照の際にご利用ください。

なお、これらの論文は、**すべて本書のために作成した架空のものです**。データはもちろん先行研究の紹介も、すべてが架空のものですので注意してください。

動物に対する共感性尺度の作成

問題・目的部分の要約

人間と自然との関係は現代的テーマの一つである。特に動物との関係は、アニマル・セラピーやペット・ロスなどとの関係で、その心理的利点や課題が浮かび上がっている。人間同士については共感性という概念を用いてその関係について検討されているが、人間と動物についても、共感性という概念を用いることでさらに深く検討できるのではないかと考えられる。そこで本研究では、動物に対する共感性尺度を作成することを主たる目的とする。また、動物の飼育経験との関連についても検討する。

方 法

「動物に対する共感性尺度」は、既存の共感性尺度（Zeisberg, 1979; 堀川, 1982; 一宮・岡崎, 1997 など）を参考にしながら、今回新たに作成した。まず既存の尺度から、人間と動物との関係にも適用できると判断される項目を選出した。さらにペットを飼っている大学生 34 名にインタビューを行い、そこに表現された内容で共感性と判断される内容を加え、52 の項目を作成した。その後心理学を専攻する大学院生 3 名に、内容的妥当性の判断や項目の類似性、表現のわかりやすさなどの検討を依頼し、最終的に 20 項目を利用することとした。回答は「はい」「どちらかといえば、はい」「どちらともいえない」「どちらかといえば、いいえ」「いいえ」の 5 段階で求めるものである。

本調査では、この「動物に対する共感性尺度」と動物の飼育経験を問う調査用紙を作成した。飼育経験は、自宅で何をいつからいつまで飼育していたかについて記入を求めるものである。調査対象は、東海地方にある公立普通科高校（男子 32, 女子 36）、公立商業高校（男子 21, 女子 48）、私立普通科高校（男子 55, 女子 60）の 3 校で、いずれも 2 年生を対象として、2004 年 5 月に調査を実施した（カッコ内は男女別の有効回答者数）。調査用紙を配布後、ここでいう動物とは、犬や猫、うさぎ、小鳥など人間に飼われている小動物をさし、トカゲなどの爬虫類や虫は含まないこと、さらに調査への協力は任意であり、またそれによって個人が評価されるものではないことを調査実施者から説明し、その後同意者のみに回答を求めた。

結 果

本調査は、268 名からの回答を得ることができた。そのうち、欠損値を含んだ 16 名を除いた 252 名分の回答を分析に用いる。

まず、動物に対する共感性尺度の各項目について項目分析を行った。「はい」を 5, 「どちらかといえば、はい」を 4, 「どちらともいえない」を 3, 「どちらかといえば、いいえ」を 2, 「いいえ」を 1 として得点化した。項目毎の平均値, 標準偏差は Table 1 に示す通りである。また, ある選択肢に対象者の 75%以上が集中しているような項目もないことを確認した。そこで 20 項目すべてを用いて, 因子分析 (最尤法, バリマックス回転) を実施した。

Table 1 動物に対する共感性尺度項目の記述統計量

	平均値	標準偏差
1. 動物の顔を見ると, その動物が何を考えているのかわかる	4.032	1.629
2. 動物と人間はともだちになることができる	3.917	1.274
3. 人間と動物はお互いにわかり合える	2.818	1.807
4. 私が悲しい時には, 動物はそれをわかってくれる	4.579	1.114
5. 動物は人間の気持ちを理解することはできない	1.948	1.879
6. 動物にふれていると癒される	4.433	1.237
7. 動物と一緒にいるとさびしさがまぎれる	3.818	1.520
8. 動物も気持ちが表情にあらわれると思う	4.560	1.060
9. 動物の気持ちがわかるようになりたい	3.302	1.341
10. 動物の鳴き声を, 人間の言葉に翻訳できればいいのと思うことがある	4.726	0.897
11. 動物の言葉を話せるようになりたい	1.266	0.443
12. 動物に私の気持ちをわかってほしいと思うことがある	2.968	1.929
13. 動物は人間に気持ちをわかってほしいと思っているはずだ	4.750	0.831
14. 鎖でつながれたり檻の中に入れられた動物を見ると, かわいそうになる	4.020	1.043
15. 飼っていた動物を捨てることは絶対にはならないことである	4.659	0.979
16. 飼われている動物はその家族の一員である	3.425	1.787
17. 動物にとっては, 人間に飼われているよりも, 自然の中で暮らしている方がよい	4.115	1.382
18. 動物は人間よりレベルの低い生き物である	3.798	0.403
19. いつも動物と一緒にいたい	4.048	1.356
20. 動物も人間と同じように, 仲間の気持ちがわかると思う	2.893	1.998

その結果, 固有値 1 以上の因子が 6 つ認められた。固有値の推移は, 第 1 因子から順に 6.054, 2.990, 2.179, 1.465, 1.226, 1.065, …であり, スクリー基準からは 3 因子構造とも考えられる。そこで, 3 因子を中心に抽出する因子数を変えながら結果を比較検討し, より単純構造に近く, また解釈もしやすいことから最終的に 3 因子を抽出することを適当と判断した。さらに, いずれの因子にも高い負荷量を持たない項目, 複数の因子に同程度負荷していた 2 項目を削除し, 再度 3 因子を指定した因子分析 (最尤法・バリマックス回転) を行った。回転後の結果を Table 2 に示す。

第 1 因子は, 「動物にふれていると癒される」, 「動物も気持ちが表情にあらわれると思う」などといった項目が高い因子負荷を示しており, 感情に関連した内容の項目群といえよう。またその感情が, 人間と動物でわかりあえるといった項目も, この因子への負荷が高い。そこでこの因子を「感情的触れ合い」の因子と命名する。

Table 2 動物に対する共感性尺度因子分析結果

	f1	f2	f3	h^2
6. 動物にふれていると癒される	.890	.051	.124	.810
8. 動物も気持ちが表情にあらわれると思う	.850	.104	.004	.733
1. 動物の顔を見ると、その動物が何を考えているのかわかる	.820	.078	.166	.706
4. 私が悲しい時には、動物はそれをわかってくれる	.815	.040	.069	.671
7. 動物と一緒にいるとさびしさがまぎれる	.774	.065	.182	.636
2. 動物と人間はともだちになることができる	.620	.011	.103	.395
5. 動物は人間の気持ちを理解することはできない	-.603	-.074	-.277	.446
3. 人間と動物はお互いにわかり合える	.555	.121	.236	.378
17. 動物にとっては、人間に飼われているよりも、自然の中で暮らしている方がよい	-.029	.879	.110	.786
14. 鎖でつながれたり檻の中に入れられた動物を見ると、かわいそうになる	.061	.740	.049	.554
16. 飼われている動物はその家族の一員である	.057	.734	.167	.570
15. 飼っていた動物を捨てることは絶対にしてはならないことである	.052	.688	.091	.484
18. 動物は人間よりレベルの低い生き物である	-.118	-.393	-.005	.168
9. 動物の気持ちがわかるようになりたい	.134	.101	.827	.712
12. 動物に私の気持ちをわかってほしいと思うことがある	.212	.033	.695	.529
11. 動物の言葉を話せるようになりたい	.063	.018	.549	.306
13. 動物は人間に気持ちをわかってほしいと思っているはずだ	.092	.127	.532	.308
10. 動物の鳴き声を、人間の言葉に翻訳できればいいのにとと思うことがある	.168	.096	.526	.314
寄与率 (%)	25.746	14.274	12.792	
累積寄与率 (%)	25.746	40.020	52.813	

続く第2因子には、「動物にとっては、人間に飼われているよりも、自然の中で暮らしている方がよい」、「鎖でつながれたり檻の中に入れられた動物を見ると、かわいそうになる」といった項目が高く負荷している。人間に基本的な人権があるように動物にもそれに類似したものを認め、それに対する配慮意識を表している項目群といえるのではないだろうか。そこでこの因子を、「権利への配慮」因子と命名する。

第3因子は、「動物の気持ちがわかるようになりたい」、「動物に私の気持ちをわかってほしいと思うことがある」などといった項目が高く負荷した。第1因子と類似して「わかる」という内容が集まっているが、第1因子は「わかり合える」という意識を示しているのに対して、第3因子は「わかり合いたい」という願望を示していると考えられよう。そこでこの因子は、「理解希求」の因子と命名する。

以上のような因子分析結果を踏まえ、動物に対する共感性尺度の下位尺度を構成する。それぞれの項目を、最も高い負荷量を示す因子を構成するものとみなすと、「感情的触れ合い」の下位尺度は8項目、「理解希求」および「権利への配慮」の下位尺度は5項目で構成される。なお、因子負荷量が負であった項目については、これを逆転項目とした。次に α 係数を用いて各下位尺度の内部一貫性を検討したところ、「感情的触れ合い」は.911、「権利への配慮」は.801、「理解希求」は.734であった。「理解希求」は若干低い値であるが、5項目から構成されることを踏まえると、利用には十分な内部一貫性を有したものといえよう。そこで、下位尺度毎にすべての項目を用い、その合計を各下位尺度得点とした。各下位尺度の平均値および標準偏差をTable 3に示す。

次に、動物の飼育経験への回答をもとに、対象者を経験のある群と、ない群に2分した。飼育期間は、まったくない者が129人であった。残りの123人は何らかの経験を持っているが、「友人宅のペットを1週間」というような非常に期間の短い者も含まれていた。そこで本研究では1ヶ月以上の飼育期間という基準を設けそれ以下であった3名は分析の対象から外すこととし、経験のある群として120人を選出した。飼育した動物は、イヌと

ネコが非常に多く、ハムスター、インコなどの鳥類がそれに続いていた。

Table 3 には、飼育経験の有無別に、動物に対する共感性得点、および飼育経験によって共感性得点が異なるのか否かについて、 t 検定による検討を行った結果も合わせて記載した。

Table 3 動物への共感性各下位尺度得点の飼育経験による比較

	全体 ($n=252$)		飼育経験あり群		飼育経験なし群		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
感情的触れ合い	31.206	9.222	32.725	8.816	29.923	9.482	2.410*
権利への配慮	17.421	4.513	17.367	4.733	17.411	4.351	0.077
理解希求	17.012	4.180	18.450	3.312	15.605	4.450	5.689**

* $p < .05$, ** $p < .01$
自由度はいずれも247

Table 3 にみられるように、「感情的触れ合い」、「理解希求」については経験あり群となし群の間に有意な差が認められ、いずれも経験あり群の方が高い値であった。すなわち、これらの共感的意識については、飼育経験と何らかの関係があると考えられる。他方、「権利への配慮」については、平均値はほぼ同等であり有意差は認められなかった。

(以下、略)

介護意識の形成

— 高齢者との同居経験と高齢者観との関連から —

問題・目的部分の要約

高齢化社会の到来を目前にして、誰が介護を引き受けるかという問題は、政策的というマクロな視点においても、家族内役割分担というミクロな視点においても、非常に重要で、喫緊の問題といえる。この研究では、介護に積極的に参加しようとする介護意識の形成について検討する。具体的には、その形成に大きく影響していると考えられる、高齢者との同居経験（期間）、またその経験や他からの影響を受けて形成されと考えられる高齢者観との関連を探る。

方 法

2004 年 11 月に、首都圏に位置する大学で、経済学部および経営学部生が受講する社会福祉関係の授業 3 クラスにおいて、調査概要を説明した後、協力に同意した学生を対象に調査を実施した。調査内容は、性別と年齢の他、次の 3 点である。

(1) 高齢者との同居経験

同居（二世帯住宅や隣地に居住している場合も同居とみなす）経験のある高齢者の人数とその期間をたずねた。高齢者については年齢では特定せず、「あなたのおじいさんやおばあさん、もしくはそれ以上の年齢の人」と教示し、誰（自分との関係）と、いつからいつまで同居したのかを所定の欄に記入するように求めた。なお、同居していたはずであるが、幼少期のことで記憶にないという場合が考えられるため、記憶にある人のみについて記入するように求めた。

(2) 介護意識

安木(1989)は、Johnson & McArdle(1986)の示した理論をもとに、高齢者介護全般に関する意識を測定する高齢者介護性測定尺度を作成している。本研究ではこの尺度中、介護への積極性をあらわす「介護積極性」因子を構成する、「機会があれば、ぜひ介護をしたい」「高齢者の介護は、自分が成長できるきっかけになると思う」など 6 項目を利用した。回答は、安木(1989)にならい、「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの 5 件法を採用した。

(3) 高齢者観

高藤(2000, 2001)が作成した高齢者観尺度を用いた。この尺度は 23 項目から構成されるものであり、3 つの下位尺度から構成される。それぞれの下位尺度は、有能であり、社会的に有用な存在であると認識する傾向を示す「ポジティブな高齢者観」(9 項目；「高齢者には若い者が持たない知恵がある」など)、弱者であるという認識の傾向を示す「ネガティブな高齢者観」(8 項目；「高齢者は、守られるべき社会的弱者だ」など)、および「無関心」(6 項目；「加齢に伴う心身の変化についてもっと知りたい(逆転項目)」など)と命名されている。なお回答には高藤(2001)同様、「そう思わない」から「非常にそう思う」の 5 件法を用いた。

結 果 と 考 察

本調査の回答は 395 名から得られた。平均年齢は 19.87 歳 (SD は 1.13) であったが、18 歳から 57 歳までにわたっていた。そこで、分析の対象となる年齢を 18 歳から 24 歳まで (383 名) に限定することにした。さらにそのうち、高齢者との同居経験がある者は 172 名 (男 94 名, 女 78 名) であった。その期間は、最も短い場合で「約 1 ヶ月」であった。1 ヶ月といえども、同居していれば高齢者の生活について理解がすすむであろうと判断し、以下ではこの 172 名を対象として分析を行う。

同居した人数は、1 人が 84 名 (男 44 名, 女 40 名)、2 人が 69 名 (男 40 名, 女 29 名)、3 人が 13 名 (男 7 名, 女 6 名)、4 人以上が 6 名 (男 3 名, 女 3 名) であった。期間については、同居していた高齢者の人数に関わらず、1 年未満の場合を 1、1 年以上 2 年未満の場合を 2 というように数値化した。

次に、本研究で利用した尺度について、その信頼性と基礎統計量を算出した。各尺度については、項目平均点を尺度得点としている。その結果を Table 1 に示す。 α 係数を用いて信頼性を検討したところ、Table 1 に示されているように、いずれの尺度についても利用に十分な値と判断できよう。また各尺度の平均値および標準偏差は、大学生を対象としている先行研究 (安木, 1992; 高藤, 2001) とほぼ同様の値であった。

Table 1 各測度の平均値, SD および α 係数

	平均	SD	α
同居期間	13.65	6.66	—
介護意識	3.49	1.62	.744
ポジティブな高齢者観	2.46	1.50	.871
ネガティブな高齢者観	2.89	1.75	.833
無関心	3.73	1.31	.802

本研究は、高齢者との同居経験の中でも、同居期間の影響について主に検討しようとするものであるが、それに先立って同居人数が介護意識や高齢者観におよぼす影響を検討しておくべきであろう。そのため、介護意識お

よび高齢者観の尺度得点について同居人数を要因とする1要因分散分析を行った。なお、同居人数が4人以上という回答者は少数であったため、3名以上をひとつのカテゴリとしてあつかった。その結果をTable 2に示す。

Table 2 1 要因分散分析結果

	1名($n=84$)		2名($n=69$)		3名以上($n=19$)		F 値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
介護意識	3.57	1.57	3.50	1.68	3.24	1.64	0.372	
ポジティブな高齢者観	2.49	1.50	2.47	1.52	2.33	1.46	0.092	
ネガティブな高齢者観	2.88	1.72	2.87	1.82	3.00	1.70	0.047	
無関心	4.09	1.22	3.43	1.39	3.57	1.12	4.731**	1名>2名

** $p<.01$; 自由度はいずれも(2, 155)

分散分析の結果、無関心のみで1%水準の有意差が認められた。Tukey法による多重比較(5%水準)を行った結果、1名群の平均値が2名群より有意に高いことが明らかになった。無関心については、1名群と2名群の間にのみ有意な差が認められ、3名以上群は他の2つの群と有意な差を示さず、またその平均値も、1名群と2名群の中間に位置している。このように、無関心の平均値は同居人数の多少と一貫した傾向はみせていない。そのため、1名群と2名群の平均値の差に同居人数が影響しているとみなすことは難しく、特に1名、2名の同居人数と関連する他の変数の影響が考えられる。これらのことより、介護意識や高齢者観に及ぼす同居人数の影響は、大きくないものと考えてよかろう。

そこで次に、同居期間、介護意識、ポジティブな高齢者観、ネガティブな高齢者観、無関心の各変数間の相関係数を算出した。さらに、これらの変数内で、求められる2変数以外の変数の影響をコントロールした偏相関係数も算出した。その結果をTable 3に示す。

Table 3 変数間の相関、偏相関係数

	同居期間	介護意識	ポジティブ な高齢者観	ネガティブ な高齢者観	無関心
同居期間	—	.345**	.172*	.242**	-.352**
介護意識	.302**	—	.235**	-.349**	.226**
ポジティブな高齢者観	.313**	.229**	—	.377**	.056
ネガティブな高齢者観	.212**	-.163*	.386**	—	.204*
無関心	-.246**	.101	.079	.123	—

表中右上が相関係数、左下が偏相関係数

* $p<.05$, ** $p<.01$

Table 3より、相関係数においては、無関心とポジティブな高齢者観を除くすべての変数間において有意な相関が認められている。また介護意識を中心に考察すると、同居期間との正の相関、ネガティブな高齢者観と負の相関が相対的に強く、同居期間が長いほど、またネガティブな高齢者観でないほど、介護意識は高くなるといえ

よう。またポジティブな高齢者観および無関心とも正の相関が認められている。ポジティブな高齢者観との正の相関は納得できるものであるが、無関心であるほど介護意識が高くなるという点は解釈が難しいといえよう。

このような関連について偏相関係数をもとに考察すると、解釈が容易になる。介護意識を中心に考察すると、それと最も高い偏相関係数が認められる変数は同居期間であり、同居期間が長いほど介護意識が高まるということを示している。係数の大きい順としては、これにポジティブな高齢者観との正の値、ネガティブな高齢者観との負の値が続き、無関心とは有意な関連性が認められなかった。相関係数では相対的に強い関連が認められていたネガティブな高齢者観との関係であるが、偏相関係数で検討すると、その関連性は弱くなっている。

また、その他の関連性としては、無関心の変数が、同居期間とは負の有意な関連があるものの、他の変数とは独立した位置にあることがわかる。またポジティブな高齢者観とネガティブな高齢者観は、ともに同居期間と正の関連があり、同時にこの2変数間にも正の偏相関係数が認められている。これは、同居期間が長いほど、高齢者とのかかわりが増加し、ポジティブな経験とネガティブな経験の両方が増加するためと推測できよう。

(以下、略)

Point ● 論文にミスはない……ことはない

論文にミスはない、と考える人も多いかと思いますが、残念ながらまれにミスがあります。ミスというのは誤字、脱字だけでなく、文章や図表中の数字において記載ミス、転記ミスがあったりします。論文を読んでいて「おかしいな」と思ったら、自分の読み違いと同時に著者のミスを疑うことも不適当なことではありません。

もしこの論文で、Table 3 の注記に「表中左下が相関係数、右上が偏相関係数」と記載されていたらどうでしょうか。そうすると、本文と表が示すことが不整合になりますので、比較的気づきやすいと思います。しかし、本文が正しいのか、注記が正しいのかは判断できません。こうなると、著者に問い合わせるしか正しいところを知る方法はありません (p.206 Point 参照)。

なお論文のミスが見つかった場合、その論文が掲載された雑誌の後の号に、訂正情報が掲載されることもあります。「おかしい」部分がある論文にであったら、まずはその後の雑誌を見て、訂正情報があるかどうかを確認してみましょう。

交際経験が同性との関係観におよぼす影響

— 大学生を対象として —

問題・目的部分の要約

青年期における異性との交際経験は、精神的安定や自己成長、アイデンティティの形成などの自己に関する側面に対する影響が指摘されている。そして、異性間での関係構築に関する意識への影響も従来の研究で指摘されてきている。それらの知見を踏まえて、青年期における異性との交際経験は、影響力の大きな学習経験と指摘されている。異性との交際が人間関係のひとつの形態であることを考えれば、その経験はさまざまな人間関係へも影響をおよぼす学習経験になっているであろう。では、同性間での関係に対する影響はどのようなものなのであろうか。本研究は、交際経験が同性との関係観におよぼす影響について検討することを目的とする。また、他者との関係の取り方については性差があるといわれており、この点も含めた検討を行う。

方 法

2005 年 10 月から 2006 年 2 月にかけて、全国の 10 大学（中国 1，四国 1，関西 3，中部 3，関東 2）に在籍する大学 1 年生を対象に調査を実施した。高校生を対象としたいいくつかの調査（少年青年協会, 1993; 小田, 2000; 中西部新聞, 2003 など）から、交際経験率は男女ともに 40% 程度と考えられる。大学生になると交際範囲も広くなり、交際経験者の比率がさらに高まるだろう。そこで今回は、対象を入学後まもない 1 年生（浪人経験等をもたない、18 歳もしくは 19 歳の者）に限定した。具体的な実施方法は、各大学に所属する教員に調査を依頼し、授業等で協力者をつのった。回収は質問紙に添付した封筒による郵送で行った。回収できたのは 361 部であった。

調査内容は、大学名、性別などの基本属性と、交際経験の有無、同性との関係観である。同性との関係観については、長期的関係観、妥協的關係観、融合的関係観の 3 つの側面についてたずねた。長期的関係観は、田中 (1994) の研究で検討された、11 項目から構成されている尺度である。将来指向的な恋愛観を人間関係観に応用したものであり、短期間で終わるのではなく、長期にわたって関係を維持、継続、発展させようとする意識を測定するものである（項目例「この先もずっと一緒にいたいと思えるような人と友人でいたい」）。妥協的關係観と融合的関係観を測定する尺度は、Brown (1979) や Jones (1981), Kent, *et al.* (1992) などの作成した友人関係等に関する尺度を統合的に検討した佐々木 (1998) によって作成され、信頼性と妥当性が検討された尺度である。妥協的關係観は、友人関係の維持や発展には、相手への配慮や妥協が必要だとする意識を測定するものであり（項目例「友

人との関係においては、お互いが少しずつ譲り合うような気持ちも大切である。)), 融合的関係観は、気持ちや価値観、行動の一致を関係の中に必要とする意識を測定するものである (項目例「仲間や友人には、自分のすべてを知ってほしいと思う」)。両者ともに 10 項目で構成される。本研究では、全体的な統制をとるために、用語、文末表現等に若干の修正を加えたうえで、これらの項目を利用した。なお、対象を同性に限定するため、「同性の親友や友人、仲間についての、あなたの考えをおたずねします」という文言を教示文に挿入している。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」の 7 段階で求めた。なお、得点化は、「あてはまる」場合を 7 とし、「あてはまらない」に向かい 6 から 1 を与えた。逆転項目は、それと逆の点数を与えた。

結 果

回収された 361 部のうち、記入漏れなどのない 359 名の回答を分析に用いる。男女別の交際経験の有無は、Table 1 に示す通りであった。高校生を対象とした調査結果 (少年青年協会, 1993; 小田, 2000; 中西部新聞, 2003 など) よりも、若干高目の経験率であるが、調査実施時期が大学 1 年生の秋から冬ということを考慮に入れると、経験率という面で平均的なサンプルといえよう。

Table 1 男女別交際経験

	交際経験あり	交際経験なし	合計
男性	78 (52.3)	71 (47.7)	149
女性	113 (53.8)	97 (46.2)	210
合計	191 (53.2)	168 (46.8)	359

カッコ内は%

同性との関係観の各尺度については、それぞれオリジナルの項目に若干の修正を加えたので、その信頼性および妥当性について検討を行った。同性との関係観の 31 項目に対して、主因子法により 3 因子を抽出し、プロマックス回転を施す因子分析を行った。その結果を Table 2 に示す。

また因子間相関は、f1 と f2 の間に .608、f2 と f3 の間に .610、f3 と f1 の間に .574 という相関係数が認められ、相互に中程度の相関関係にある因子が抽出されたといえる。それぞれの因子に対しては、第 1 因子には「融合的関係観」の項目が、第 2 因子には「長期的関係観」の項目が、そして第 3 因子には「妥協的關係観」の項目が高いパターンを示している。このような因子分析の結果から、今回利用した 3 尺度は、相互に中程度の相関関係にあるものの、異なった因子から影響を受けている項目群といえよう。以上のことから、今回利用した 3 尺度は、相互に関連性はあるものの、それぞれ異なった人間関係観の側面を測定しているといえよう。

さらに、それぞれの尺度ごとに α 係数を求めたところ、「融合的関係観」で .841、「長期的関係観」で .801、「妥協的關係観」で .784 という値であり、オリジナルの研究で認められた係数と同程度の十分な値といえる。以上のような検討から、本研究においてオリジナルの尺度に一部改変を加えたが、その信頼性は損なわれていないといえるだろう。そこで全項目を用い、それぞれの尺度の得点を項目平均値として算出した。

Table 2 同性との関係観項目に対する因子分析結果

	項目	f1	f2	f3
融合	だれかに興味をもったなら、その人のすべてを知りたいと思う	.805	-.004	.015
融合	仲間や友人には、自分のすべてを知ってほしいと思う	.774	-.145	.050
融合	友人に隠し事をされると、とても嫌な気持ちになる	.724	.009	-.163
融合	友人なら、本心を隠さずつきあうのが当たり前だ	.667	-.072	-.009
融合	仲間とは、いつもいっしょにいたい	.616	-.039	.036
融合	同じ価値観をもつ者同士であれば、友人関係はうまくいく	.505	.005	.110
融合	親友とは一心同体であることが理想だ	.471	.035	-.040
融合	友人が喜んでいる時には、少し大げさなくらいに祝福することがよい	.454	.160	-.108
融合	たとえ友人でも、相手に隠していることがあって当然だ(R)	.382	.068	.206
融合	趣味や関心が異なっている人には興味をもてない(R)	.247	.154	.115
長期	今の友人とは、この先もずっと一緒にやっていきたいと思う	.015	.851	-.128
長期	歳をとっても、その人と友だちでいたいと思える相手が理想の友人である	-.010	.816	.078
長期	一度友人になったなら、長くつきあっていきたい	.136	.751	.040
長期	これからもずっと友人でいられるだろうなと思える友人がいる	-.052	.498	.124
長期	頻繁に会えなくなった友人には、よく電話やメールなどをする	.075	.444	-.045
長期	昔からの友人が多い方だ	-.168	.418	-.011
長期	新しい友人ができれば、古い友人に紹介することが多い	-.007	.406	.104
長期	友人関係は、なかなか長続きしない(R)	-.028	.373	-.060
長期	新しい友人ができれば、古い友人と疎遠になることは仕方のないことだ(R)	.033	.335	-.022
長期	会う回数が減っていくことは、その友人との関係が薄くなったということだ(R)	.086	.297	-.026
長期	友人は増えていくのではなく、入れ替わっていくものだ(R)	.055	.240	.105
妥協	友人との関係においては、お互いが少しずつ譲り合うような気持ちも大切である	.007	-.083	.661
妥協	時によっては、友人の言い分に対して全面的にしたがうことも必要である	-.135	.030	.540
妥協	友人の主張は、全部ではないにしろ、できる限り受け入れている	-.010	-.027	.525
妥協	相手の悪いところも含めて認めるのが友人というものだ	-.035	-.078	.518
妥協	適度の自己主張と、適度の妥協がよい友人関係には不可欠である	.001	-.009	.509
妥協	いくら親友だからといっても、自己主張はほどほどにしておくことが望ましい	-.008	.006	.507
妥協	よい友人関係を続けるには妥協はつきものである	.016	.007	.498
妥協	親友だからといって、あれこれと指図をするのはよくない	.048	.100	.496
妥協	友人には、自分の意見を全面的に受け入れてほしい(R)	.000	.075	.492
妥協	友情を育てるには我慢も必要だ	.105	-.004	.405
因子間相関		f1	f2	f3
			.608	.574
				.610

(R)は逆転項目を示す

続いて、経験と性別による同性との関係観の差異を検討するために、各尺度の得点について経験の有無と性別を要因とする2×2の分散分析を行った。その結果の概略をTable 3に示す。

まず、長期的関係観においては、いずれの群においても平均値は4点台前半であり、有意な交互作用、主効果ともに認められなかった。

次に妥協の関係観では、有意な交互作用 ($F(1,355)=6.46, p<.05$) と、経験の主効果 ($F(1,355)=8.74, p<.01$) が認められ、男女で経験の効果が異なるということが示された。平均値の差異から、男性は交際経験の有無にかかわらず同程度の得点であるが、女性は、経験なしの群よりありの群の得点が高くなるといえる。

Table 3 分散分析の結果

		男性		女性		性の主効果	経験の主効果	交互作用
		平均	SD	平均	SD			
長期的関係観	なし	4.07	0.89	4.06	0.91	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>
	あり	4.20	0.84	4.00	0.93			
妥協的關係観	なし	4.34	0.87	4.16	0.75	<i>ns</i>	**	*
	あり	4.37	0.78	4.63	0.79			
融合的関係観	なし	4.28	1.05	4.59	0.93	*	<i>ns</i>	<i>ns</i>
	あり	4.32	1.03	4.44	0.85			

* $p < .05$, ** $p < .01$

最後に融合的關係観については、性の主効果 ($F(1,355)=4.28, p<.05$) が認められ、女性の方が有意に平均値が高いことが示された。経験の主効果は認められず、このような同性との関係観は交際経験によって変化するものではないといえる。

(以下、略)

40 歳代男性の生活満足感に影響する要因の探索的研究

問題・目的部分の要約

人生の中盤にあたる成人期は、従来から人生の中でも最も安定した時期と考えられてきた。ところが 20 世紀中盤からは、人生の他の時期と同様に変化、変動の多い時期ととらえ直されるようになってきた。成人期の生活は、複数の場、複数の役割で構成されている。そのため、側面ごとに研究の俎上に上ることが多いが、それらは一人の個人の中で総合的に判断され、主観的な生活満足感に影響を与えているといえよう。本研究では、これまでの研究を参考に、主観的な生活満足感に影響を与えると考えられる要因を、健康、家族関係、仕事ストレス、金銭、自由になる時間の 5 つに整理した。そして、一般的に働き盛りといわれる 40 歳代男性の有職者を対象に、その影響について検討しようとするものである。

方 法

調査時期および対象

2002 年 6 月から 7 月にかけて、九州にある 4 つの事業所（製造業 2 社、小売り業 1 社、情報処理業 1 社）の正規雇用従業員に対して調査を実施した。調査は、勤労者の生活感調査として、性別、年齢を問わずに実施したが、本論では 40 歳代男性のデータのみを分析対象とする。

調査内容

年齢、性別、世帯人数などの属性の他、以下の 6 つについてである。

(1) **健康** 代表的な心身両面に関する総合的健康調査票である QoFHHM 調査票日本版（QoFHHM 研究会, 1990a）を用いた。結果はマニュアル（QoFHHM 研究会, 1990b）に基づいて整理した。その得点範囲は、60 点から 120 点までであり、高得点であるほど健康度が高いことを示す。

(2) **家族関係** 認知された家族の凝集性を測定する尺度である家族凝集性尺度（西, 2001a, 2001b）を用いた。教示文、選択肢、得点化も西(2001a)にならった。この尺度は 3 つの下位因子をもつことが明らかにされているが、19 項目の総得点が家族凝集性という概念を代表する点数として適切とされている（西, 2001b）。回答は 7 段階で求めるものであり、得点範囲は 19 点から 133 点、凝集性を高く認識しているほど高得点となる。なお 1 人世帯の場合には、記入を求めている。

(3) **仕事ストレス** Spence(1990)の作成した職務および職場ストレスを測定する尺度の簡易版(SWSS Short

Form; Spence, et al., 1993)を邦訳したものである、塩口・谷脇（1998）の仕事ストレス尺度を用いた。塩口・谷脇にならない、職務ストレスと職場ストレスの合計を仕事ストレス得点とした。得点範囲は 10 から 100 であり、高得点であるほどストレスを感じていることを示す。

(4) **金銭** おおよその年間世帯所得について自己申告を求めた。

(5) **自由になる時間** 自らの意思で自由に何かをすることができる時間を、1 週間にどの程度確保することができるかを、「あなたが自分で自由に使える時は、1 週間にどれくらい確保できるでしょうか。その合計時間数をお答えください。ただし、睡眠時間は通常通りに確保するとします」という教示文でたずねた。

(6) **主観的生活満足感** 安曇（印刷中）が、主観的な生活満足感を測定するために作成した尺度から、「全体的満足感」の因子を構成する 7 項目を用いた。安曇は、この因子が主観的な生活満足感の中で、中核的な位置にあるものとしている。項目は、「今の自分の生活に満足している」、「自分の今の生活は、望んでいたものとはまったく違っている（逆転項目）」、「家庭についても、仕事についても、自分の生き方についても、特に後悔していることはない」などである。なお、これらの項目は調査票においては(2)の家族関係尺度に混入させた。そのため回答は 7 段階である。

調査手順

以上の(2)から(6)を 1 冊の調査冊子にまとめ、QoFHHM 調査票日本版、依頼文、返送用封筒とともに各事業所の福利厚生関係部署を通して従業員に配付し、郵送により調査用紙を回収した。総計で 1,528 部を配付し、回収できたのは 962 部であった（回収率 63.0%）。記入漏れのあるものや、後に述べる理由で分析に不適当と考えられるデータを除いた結果、本研究の対象になる、家族をもつ 40 歳代男性の有効回答は 128 部であった。

結 果 と 考 察

まず、128 名の有効回答を得点化し、平均値、標準偏差とともに、最小値、最大値を算出した。主観的生活満足感については α 係数を算出したところ、 $\alpha = .840$ であり、十分な内部一貫性を有していることが確認できた。さらに、各指標間のピアソンの積率相関係数も算出した。それらを一覧にしたものが Table 1 である。なお、金銭に関しては、数ケースであるが非常に大きい値が含まれていた。これらは分析において結果を歪める可能性が大きいいため、便宜的に上限を 2000 万円とし、それより大きいケースについては分析の対象外としている。

Table 1 各測定値の基礎統計量と相関係数

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	相関係数				
					健康	家族関係	仕事ストレス	金銭	自由になる時間
健康	90.34	12.36	68	115	1	—	—	—	—
家族関係	88.70	11.42	55	107	.305 **	1	—	—	—
仕事ストレス	64.76	22.17	23	96	-.198 *	-.212 *	1	—	—
金銭	774.91	319.60	470	2000	.029	.079	.203 *	1	—
自由になる時間	24.55	9.33	3	40	.313 **	-.239 **	-.335 **	.045	1
主観的生活満足感	26.09	11.33	7	44	.423 **	.425 **	-.304 **	.250 **	.402 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

それぞれの指標の平均値から、本調査対象の特徴を検討すると、まず QoFHMH の平均値は、マニュアル (QoFHMH 研究会, 1990b) によると、平均的な健康水準の範囲内にあった。家族関係得点は、ほぼ西 (2001b) の調査における得点と同等であった。なお、西 (2001b) の研究では、中学生、高校生の子どもをもつ父親 (32 歳から 60 歳) をまとめて平均点を算出している。また仕事ストレス尺度の平均得点は、標準化を行った塩口・谷脇 (1998) によると、55 パーセンタイル付近に位置し、ストレスはやや高めであることがわかる。金銭に関しては、家計調査等にみられる、世帯主が 40 歳代の勤労者世帯の実収入 (約 680 万円、平成 13 年家計調査より) よりも約 100 万円高い値であるが、今回の調査では最小が 470 万円であることを考えると、特に高所得者層に偏っているとはいえないであろう。自由になる時間に関しては、同様の方法を用いた比較対象となるデータは見あたらない。平均すると 1 日 3 時間強となるが、休日がその多くを占めると推測すれば、勤務日の自由時間はかなり少なくなると考えられよう。主観的生活満足感は、安曇 (印刷中) の研究における壮年期 (40~59 歳) の男性の平均値とほぼ同等であった。

以上の結果から、本調査対象の示す平均値は、自由になる時間を除き、仕事ストレスが平均よりも高い傾向にあるものの、ほぼ従前の調査等と同様であるといえよう。

次に、主観的生活満足感を従属変数、その他の変数を独立変数とする重回帰分析を行った。Table 1 に示された独立変数間の相関係数は中程度以下であり、多重共線性の問題はないと考えられる。なお、変数は強制投入とした。

重回帰分析の結果、重決定係数は.499 であり、1%水準で有意な値であった。それぞれの独立変数から従属変数への標準偏回帰係数は、Table 2 に示す通りである。

Table 2 重回帰分析結果

	β
健康	.125 [†]
家族関係	.459 ^{**}
仕事ストレス	-.077 <i>ns</i>
金銭	.206 ^{**}
自由になる時間	.438 ^{**}

[†] $p < .10$, ^{**} $p < .01$

Table 2 に示されるように、健康から主観的生活満足感への標準偏回帰係数は 10%の有意傾向にあり、家族関係、金銭、自由になる時間は 1%水準で有意な係数であった。なかでも、家族関係と自由になる時間は主観的生活満足感の重要な要因となっているといえよう。

本研究における独立変数の選択は、従前の研究において主観的生活満足感と関連が認められた変数であることを条件とした。Table 1 に示されるように、いずれの独立変数においても、主観的生活満足感とは有意な相関関係にあり、この点では、従来の研究の妥当性が確認できたものといえる。しかし、重回帰分析の結果から、仕事ストレスは有意な関連を持たず、また健康も他の変数に比べると低い標準偏回帰係数に留まった。このような結果は、特に仕事ストレスと主観的生活満足感の関係について再考をうながすものといえよう。

(以下、略)

試験への動機づけとその結果の関連

— 学びの個性に着目して —

問題・目的部分の要約

個性に応じた教育という言葉は頻繁に用いられるが、現状では十分にそれに対応した指導が行われているとはいえない。Peace(1973)は、自身の教育経験を踏まえ、子どもの学習場面における個性を次の3つにまとめている。(1)経験を踏まえ、計画を立て、それを実践できる子ども、(2) 経験を踏まえ、計画を立てるが、実践でつまずく子ども、(3)経験をふまえず、がむしやりに頑張る子ども、である。本研究では、Peace(1973)の提唱したタイプを学びに対する個性ととらえ、試験への動機づけとその結果の関連に、学びの個性がどのように影響しているのかを検討することを目的とする。

動機づけと学習結果の関連については、相互に影響を与えていると考えることが適当であろう。すなわち、試験に対する動機づけが試験結果に影響を与え、その結果は次の試験に対する動機づけに影響を与えるという関係である。ところが、各個人の試験に対する動機づけの程度、また試験の結果にはある程度の一貫性があることも、経験的に、また従来の研究(今庄, 1993; 莊川, 1997 他)からも明らかである。そのため、ある試験時の動機から次の試験時の動機、ある試験結果から次の試験結果へと直接つながるパスの存在を仮定する必要があるだろう。本研究は、中学校2年生の2学期を対象期間として検討を行うが、この期間における動機づけと学習結果の関連性は、Figure 1 のように表現できよう。

本研究では共分散構造分析を用い、多母集団同時分析を通して、動機づけと学習結果の関連性における学びのタイプ間の異同を明らかにする。

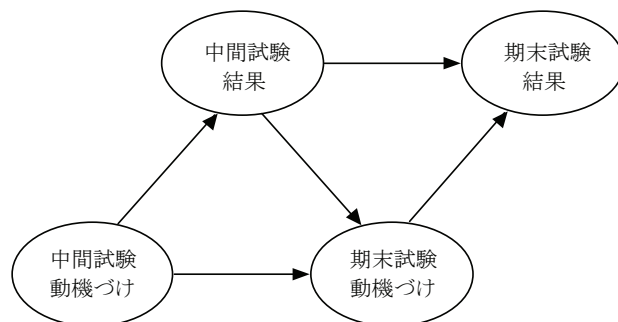


Figure 1 本研究で仮定されるモデル

方 法

2005 年の 2 学期中に、関東、東北、北海道にある少人数指導を行っている塾に通塾する、中学 2 年生を対象に、少人数ごともしくは個別に調査を実施した。これらの塾は理解度別のクラス編成を行っており、成績上位から下位まで幅広い層の生徒が所属している。調査内容は以下の通りである。

調査 1

中間試験の前々週に、学習への動機づけを測定する 3 項目（「次の試験に向けて、一生懸命勉強をするつもりだ」、「次の試験に向けて、もう一度復習をしようと思う」、「試験があると思うと、いつもより勉強したくなる（逆転項目）」）を含む調査を実施した。なお、動機づけの項目は 7 つのダミー項目とともに実施している。また、学びの個性を問う調査も併せて実施した。Peace(1973)のタイプ分けに関する記述を参考に、「タイプ 1；私は、試験を返してもらったら、それを見直して、次の試験に向けてどうしたら良いか、何ができるかを考えるようにしています。そして、その計画どおりに勉強をすすめられるように頑張っています」、「タイプ 2；私は、試験を返してもらったら、それを見直して、次の試験に向けてどうしたら良いか、何ができるかを考えるようにしています。しかし、なかなか考えたようにはいきません」、「タイプ 3；私は、終わった試験をあまり見直しません。終わったことを反省するより、次の試験で良い点が取れるように頑張りたいからです」という 3 つを設定した。この 3 つの中で、一番自分に近いものの選択を求めた。

調査 2

中間試験結果が返却された後に、中間試験の国語、数学、英語の点数（1 点台、10 点台、から 80 点台、90 点以上の 10 段階）の自己申告を求めた。

調査 3

期末試験の前々週に、調査 1 で用いた動機づけを測定する項目をダミー項目とともに実施した。

調査 4

期末試験結果が返却された後に、調査 2 と同様の調査を行った。

なお、調査に先立ち、対象となる生徒の保護者には書面をもって説明を行い、理解と協力を求めた。また生徒に対しては、記入したくなければそれでもよいこと、評価はしないので思っているままを回答してほしいことを調査実施者から口頭で説明した。

また本調査は 476 名に実施したが、すべてのデータがそろい分析対象となったのは 394 名である。

結 果 と 考 察

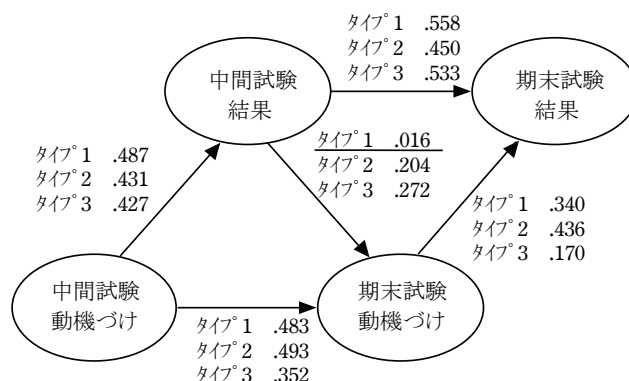
動機づけを測定する各項目、および試験の得点の平均値、標準偏差を Table 1 に示す。これらの数値から、本調査対象は特に偏った特徴を持つものではないと考えられる。また学びの個性に関しては、タイプ1を 97 名が、タイプ2を 164 名、タイプ3を 133 名が選択した。

Table 1 各観測指標の平均値および標準偏差

	平均値	標準偏差
中間動機：次のテストに向けて、一生懸命勉強をするつもりだ	3.62	1.69
中間動機：次の試験に向けて、もう一度復習をしようと思う	3.14	1.79
中間動機：テストがあると思うと、いつもより勉強したくなる	3.16	1.79
中間結果：数学	6.34	3.55
中間結果：国語	6.09	4.07
中間結果：英語	6.04	3.92
期末動機：次のテストに向けて、一生懸命勉強をするつもりだ	3.77	1.53
期末動機：次の試験に向けて、もう一度復習をしようと思う	3.29	1.72
期末動機：テストがあると思うと、いつもより勉強したくなる	3.28	1.68
期末結果：数学	6.26	3.62
期末結果：国語	6.01	3.94
期末結果：英語	6.01	3.98

次に、データと Figure1 に示した仮説モデルの適合性を検討するために、全対象者のデータを用いて、共分散構造分析を行った。なお動機づけの潜在変数については3つの動機づけ項目を、試験結果の潜在変数については3つの科目の成績を観測変数として位置づけている。分析の結果、データとモデルの適合度は満足できるレベルにあることが示された ($\chi^2(49)=93.896, ns$; GFI=.965; AGFI=.944; CFI=.989; REMSA=.048)。

さらに、それぞれのタイプごとにモデルとの適合度を検討した。それぞれのタイプにおけるパス係数を書き加えたパス・ダイアグラムを Figure 2 に示す。加えて、タイプ間でのパス係数についての検討を行った (Table 2 参照)。5%水準で有意な差は認められなかったが、タイプ2と3の間における期末試験動機づけと期末試験結果のパス、タイプ1と、タイプ2および3の間における中間試験結果と期末試験動機づけのパスなどでは、相対的に高い値が得られている。



注：下線部は有意にならなかったパス。

Figure 2 タイプ別のパス係数

Table 2 差の検定統計量

	タイプ 1— タイプ 2	タイプ 2— タイプ 3	タイプ 1— タイプ 3
中間動機—中間結果	0.163	0.139	0.022
中間動機—期末動機	0.019	1.325	1.092
中間結果—期末動機	1.161	0.433	1.455
中間結果—期末結果	1.416	1.257	0.196
期末動機—期末結果	1.110	1.888	0.874

1.96以上の場合5%水準で有意

タイプ 1 はまずまずの適合度であったが ($\chi^2(49)=52.135$, *ns*; GFI=.925; AGFI=.881; CFI=.997; REMSA=.026), Figure 2 に示したように中間試験結果から期末試験動機づけへのパスが有意なものにはならなかった。これが有意な正の値になるということは、中間試験の結果がよければ動機が高まり、悪ければ低下する関連が認められるということである。このタイプに認められた有意ではないという結果は、次の試験への動機づけが先の結果に左右されないことを示しているといえよう。

タイプ 2 では良好な適合性が認められ ($\chi^2(49)=41.542$, *ns*; GFI=.962; AGFI=.940; CFI=1.000; REMSA=.000), またすべてのパスが有意なものであった。他の 2 つのタイプとの比較から、すべてのパス係数が中間的な値であることが特徴といえよう。

タイプ 3 もまずまずの適合度といえる ($\chi^2(49)=61.992$, *ns*; GFI=.932; AGFI=.892; CFI=.991; REMSA=.045)。期末試験動機づけから期末試験結果へのパスは .170 と小さな値であったが、5%の有意水準は超えるものであった。タイプ 3 の特徴は、結果をあまり見直さず次の試験に挑むという点であるが、本結果では、中間試験結果か

ら期末試験への動機づけのパスが有意なものであり、試験の結果がよければ動機が高まり、悪ければ低下するという関連性が認められる。これはタイプ1とは逆に、動機づけが先の試験の結果に左右される群であることを示していよう。また中間試験の動機づけから期末試験の動機づけへのパスは、3群で最も低く、また期末試験の動機づけから期末試験の結果へのパスも、有意ではあったが低い値であった。このような点から考えると、Figure 1 のモデルには適合しているものの、最も動機づけと学習結果の関連が安定しない群であるとも推測できよう。

(以下、略)